

上方絵本『桃太郎』考

―狂言「節分」の取り入れ―

佐野 佳那実

1. はじめに

江戸時代の子ども向け絵本と言えば、まず、江戸で刊行された赤本というジャンルが思いおこされる。しかし、上方でもまた多くの子ども向け絵本が出版されていた事実を忘れてはならない。

赤本における「桃太郎」は、桃を食べて若返った夫婦が子をなすという、いわゆる回春型の桃太郎であるところが特徴とされるが、それ以外の箇所については現代に伝わっている桃太郎と基本的な筋は同じである。ところが、今回紹介する上方絵本の『桃太郎』は、桃から頭と手足が生えて桃太郎となり、またお供には柊と鯛の精がつくと、かなり特異な特徴を持つ。

本発表では、この上方絵本『桃太郎』の趣向が狂言「節

分」によるものであることを指摘し、その取り入れ方を考察していき、上方絵本『桃太郎』がどう評価できるかを考えていく。

上方絵本『桃太郎』は国立国会図書館所蔵の『絵本あつめ草』に所収されている子ども向け絵本(注二)で、表紙は欠けており、本文のみ六丁で構成されている半紙本である。表紙が欠けているため、作者、画工名、版元未詳だが、画風から北尾雪坑齋(注三)の作品だとされる。

II. 研究

1. 江戸の赤本「桃太郎」と上方絵本『桃太郎』

まず、江戸の赤本「桃太郎」(注三)のあらすじを挙げる。
 川から桃が流れてきて、その桃を食べたお爺さんとお婆さんは若返り、子作りをして桃太郎が産まれる。桃太郎は遅しく成長し、犬、猿、雉をお供にして鬼退治へと向かう。鬼を倒した桃太郎は鬼の宝を持ち帰る。

次に、上方絵本『桃太郎』のあらすじを挙げる。

明神から賜った桃から頭、手足が生え、成長し桃太郎と名付けられた。節分の日姉が鬼に攫われ、桃太郎は鰯の精と柊の精をお供にして姉を助けに行く。鬼との戦いの末、姉を奪い返し、鬼の宝を持ち帰る。

次の表は、江戸の赤本「桃太郎」と上方絵本『桃太郎』のストーリーを比較したものである。

おわり	お供	きびだんご	鬼ヶ島へ行く理由	産まれ方	登場人物	桃の入手	はじまり	
鬼の宝を本国へ持ち帰る	犬・猿・雉	あり	不明	桃を食べて若返り、子作りをして産まれる	爺・婆	川から流れてくる	爺は山へ芝刈りに、婆は川へ洗濯に	赤本「桃太郎」
姉を奪い返し、鬼の宝を持ち帰る(鬼も同行)	鰯の精・柊の精	なし	あり ↓ 姉が鬼に攫われる	桃から頭と手足が生える	夫婦・娘	御香之宮で明神に賜る	伏見の里の桃山が近い所に住んでいる夫婦がいる	上方絵本『桃太郎』

江戸の赤本「桃太郎」を比較していくと、上方絵本『桃太郎』は、桃から生まれた「桃太郎」が鬼ヶ島へ鬼退治に行き、鬼に勝って宝物をもらおうという基本的なストーリー展開は変わらないものの、登場人物や産まれ方、舞台設定が細かくされているなど（伏見の里「御香之宮」など）、大きく異なっている点が多く見られる。

ここで、お供の違いに注目する。一般的に知られる「桃太郎」のお供といえば、江戸の「桃太郎」に登場するような犬・猿・雉である。しかし、上方の「桃太郎」ではお供は鯛の精・柀の精になっており、大きく異なっている。

また、上方の「桃太郎」では姉が攫われる事件が起きる日を「ある年の節分なりければ」と書かれており、節分の日に設定している。

節分の風習として、節分の夜に焼いた鯛の頭を柀の枝に挿し、火で炙ってから門戸に挿すという風習がある。これは、鯛を焼く煙や柀の葉の鋭さを鬼が嫌がるということからきている。上方の「桃太郎」ではこの節分の風習を鬼に対抗する存在として登場させている。節分の風習は古くから行われており、誰でも知っている風習だと考えられる。

昔話「桃太郎」に子どもでも分かる節分の風習を取り入れることで、子どもでも違いに気づくようになってお

り、昔話の「桃太郎」ではなく、「桃太郎」と「節分」をかけあわせた新しい物語として読むことができる。

2. 狂言「節分」とのかかわり

狂言「節分」とは以下のようなものである。

狂言の曲名。鬼狂言。夫が出雲大社へ年籠り（大晦日の夜から元旦朝にかけて参籠すること）に行つた留守番をしている妻のところへ、蓬萊の島（渤海の中にあるという想像上の霊山）の鬼（シテ）が節分の豆を拾って食べようと日本へやってくる。この家の灯を頼つて案内を請い、荒麦を与えられるが見れば美しい女房である。心を奪われ、なんとか気に入られようと、蓬萊の島にはやる小歌を次々に謡つて慕い寄るが、女が受け付けないので、ついに泣き出してしまふ。そこで女は心を和らげたふりをし、鬼の宝である隠れ蓑と隠れ笠を取り上げてから家へ入れると、さて時分もよし、「鬼は外へ」と豆を鬼にぶつけて追い立てていく。鬼が純情な男性のような恋情を示すのが漫画的で、鬼の謡う豊富な民衆流行歌謡も楽しい。

（『日本大百科全書』より引用（注四））

狂言で有名な流派は大蔵流と和泉流があるが、使用さ

れている表現から、大藏流のものであると推測した。『近世子どもの絵本集 上方篇』において、上方絵本『桃太郎』に描かれた、鬼の大将が舞を踊る場面についての注では「狂言歌謡の一。虎明本『せつぶん』とあるが、上方絵本『桃太郎』の本文に表現がより近い、大藏流の『大藏虎光本狂言集』（注五）を参考にした。

次の表に、狂言「節分」と上方絵本『桃太郎』の共通点をまとめた。

<p>狂言「節分」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 女が一人で留守番している ↓家の者は出雲大社へ参詣しているため不在 ・ 蓬菜の島の鬼が豆を拾って囃もうとして日本に来る 	<p>上方絵本『桃太郎』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 娘が一人で留守番している ↓夫婦と桃太郎は歳徳神の元へ参詣しているため不在 ・ 蓬菜の島の鬼の大将が豆を拾って囃もうとして来る
<p>・ 女に対する鬼の言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> 「荒美敷の女房や 漢の李夫人 楊貴妃 小野小町は見ねばしらね 共 あれ程美敷女房も有けるぞや」 <p>・ 女を口説こうとする鬼の言葉</p> <p>「たちはいたも憎いが小だちはいたも憎いが」</p>	<p>・ 娘に対する鬼の言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> 「さてもさても美しい女房や 漢の李夫人、楊貴妃、小野小町は見ねば知らず。あんな美しき女もあるものか」 <p>・ 娘を慰めようとする鬼の言葉</p> <p>「太刀佩いたが憎いか。小太刀佩いたが憎いか。ばい」</p>

<p>どの弓かたげたも憎いとらはいとらかたげたはいとし」</p> <p>・ 女に宝物を渡すときの鬼の言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> 「蓬菜の島なる蓬菜の島なる 鬼の持宝は 隠れ篋に 隠 笠 打出の小槌しよりやふむりやふぢやうむりやふくわつしこへおまさふぞ」 	<p>どうばいとう、担げたがいとしよの」</p> <p>・ 宝物を渡すときの地の文</p> <ul style="list-style-type: none"> 「蓬菜の島なる鬼の持宝は、隠れ篋、隠れ笠、打出の小槌、しよりやうむりやうむじよむじよはつしこくにぐわつたりと与えて」
---	--

鬼が節分の日にやってきて、女（娘）に惚れる、女（娘）に対して様々な手を尽くして振り向いてもらおうと口説く、というストーリーや、「蓬菜の島の鬼」「太刀佩いたが憎いか。小太刀佩いたが憎いか。ばいとうばいとう、担げたがいとしよの」「蓬菜の島なる鬼の持つ宝は、隠れ篋、隠れ笠、打出の小槌、しよりやうむりやうむじよむじよはつしこくにぐわつたりと与えて」などの表現に共通点が見られる。

このことから一部分だけではなく、物語全体に狂言「節分」が取り入れられていると考えられる。

また、上方絵本『桃太郎』に登場する鬼はすべて角のない鬼である。これも、狂言「節分」が取り入れられて

いることが関係していると考えられる。狂言の世界では、鬼や閻魔王が主役を務める狂言を鬼狂言と呼び、鬼狂言に使用される鬼の面は「武悪」と呼ばれる狂言面であり、(図一)(注六)、



図一

この武悪面には角がない。したがって、上方絵本『桃太郎』の鬼が角のない鬼で登場するのは、こういった狂言「節分」での鬼の姿が取り入れられたものであると考えられるのである。

上方では上方狂言として人々に親しまれていた。子ども向け絵本の物語の中に狂言を取り入れることで、子どもから大人まで楽しめるような内容となっている。

III. おわりに

上方絵本『桃太郎』は、一般的に知られている桃太郎と大きく異なる点が多く見られ、相違点について考察してきた。

上方絵本『桃太郎』には、狂言「節分」が鬼の大將が舞を踊る一場面だけでなく、物語全体に取り入れられていると考えられる。また、狂言「節分」の物語中には鯛の精・柊の精は登場しない。上方絵本『桃太郎』では、一般的に知られる「桃太郎」の物語に、狂言「節分」の

演目にちなんで、鯛と柊を桃太郎のお供とした。その際、鯛と柊を擬人化させ、鬼と戦う際に、柊の葉で突いたり、鯛の頭から光線を出したりして戦うなど、擬人化の滑稽さや面白さが物語の中に生まれる。

また、狂言「節分」のストーリー展開が「桃太郎」に取り入れられていることに大人は気づくことができる。狂言「節分」のストーリー展開に加えて、節分の風習を取り入れることで、子どもは風習としての節分が「桃太郎」に掛け合わされていることに気づくことができる。このように、上方絵本『桃太郎』は大人向けの要素と子ども向け要素が含まれた作品であると考えられる。

【注】

(注一)『絵本あつめ草』は名古屋の有名な貸本屋大惣が営業に用いたもので、約二〇〇点を四四冊に合本し、国立国会図書館に所蔵されたものである。『絵本あつめ草』に所収されている絵本はすべて前後の表紙を取られ、中身だけを五、六点ずつ一冊にして閉じている。これは大惣が営業用にしたためである。上方絵本『桃太郎』の表紙が欠けているのも『絵本あつめ草』に所収される際に取られたためである。

上方絵本『桃太郎』のテキストは、中野三敏・肥田晴三編『近世子どもの絵本集 上方篇』(昭和六〇年 岩波書店)所収のものテキストとした。

(注二) 北尾辰宣とも。大坂の絵師。作画期は延享(一七四四)から安永(一七八〇)にかけての頃

(注三) 大正七年稀書複製作製の複製本に載る『むかしむかしの桃太郎』(五丁。原本は焼失)や、東京都立中央図書館ほか蔵の『桃太郎昔話』一〇丁。鱗形屋版がある。

(注四) 相賀徹夫編『日本大百科全書 一三』(昭和六二年小学館)より引用。

(注五) 橋本朝生編『古典文庫第五四〇冊 大蔵虎光本狂言集』「節分」(平成三年 古典文庫)によった。

(注六) 金子良運編『日本の美術 第一〇八号 能狂言面』(昭和五〇年五月 至文堂)によった。

【参考文献】

・吉田幸一編『古典文庫第一二二六冊 和泉流狂言集 第一一冊』(昭和三三年 古典文庫)

・鈴木重三・木村八重子編『近世子どもの絵本集 江戸篇』(昭和六〇年 岩波書店)

・中村幸彦・日野竜夫編『新編稀書複製会叢書 第五卷(草双紙・洒落本・滑稽本)』(平成元年 臨川書店)

・大塚光信編『大蔵虎明能狂言集 翻刻 註解 上巻』(平成一八年 清文堂)

・肥田皓三「北尾雪抗斎の絵本」『国文学』一〇〇号 平成二八年三月 関西大学国文学会)

— さの・かなみ 日本文学科四年生 —